九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近代日本における陶磁器産地の多様性について ： 萩焼の展開を中心にして

宮地, 英敏
九州大学大学院地球社会統合科学府社会的多様性共存コース

https://doi.org/10.15017/1477906

出版情報：地球社会統合科学. 21 (1/2), pp.29-48, 2014-12-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学』第21巻 第1-2合併号（2014）29～48
Bulletin of the Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
Vol.21, No.1-2 (2014), pp. 29～48

論 文

近代日本における陶磁器産地の多様性について
―萩焼の展開を中心にして―

The diversity of the production area of potteries and porcelains in modern Japan: Mainly focusing on the Hagi Yaki

2014年９月19日提出，2014年11月４日受理

宮地　英敏
Hedetoshi　MIYACHI

キーワード：萩焼　井戸茶碗　茶道　千宗左　一楽二萩三唐津　民芸　柳宗悦

１. はじめに

近代日本の陶磁器業に関する経済史研究は[1]、鎌田久明（1940）（1941）や奈良本辰也（1943）によって先鞭がつけられて以来、瀬戸、美濃、有田、京都、名古屋といった主要陶磁器産地を対象としながら、データの発掘や分析が進展してきた。具体的には、三島康雄（1955）は瀬戸や名古屋といった愛知県の陶磁器業を事例として、小零細経営が中小企業へと成長していく様子を描いた。また野原敏雄（1982、第２章）は、岐阜県の美濃地方東部（東濃地方）の陶磁器業を事例として、問屋に収奪されて中小企業への成長が困難な小零細経営を分析した。鎌田や奈良本から三島や野原へと至る問題関心は、マルクス経済学を念頭に置きながら、小零細経営から中小企業へ、さらには大企業へという成長を当然の「発展」と見做しながら、それの有無や状況をそれぞれ検証したものであった[2]。このような枠組みに入らない研究は、鎌谷親善（1986）（1987a）（1987b）のような技術史的な研究のみであった。

1990年代に入ると研究状況が若干の変化をみせていくこととなる。中村隆英（1985、第７章、第８章）による在来産業論の提示により、日本経済の発展において主導的な役割を果たさなかったような様々な産業もまた、総体としては日本経済に多大な影響を与えていたことが着目されるようになったためである[3]。これを受けて、「在来産業」と位置付けられる様々な産業が、経済史分析の対象となっていった。古代からの歴史を持つ陶磁器業も、当然その「在来産業」分析の対象となり、大森一宏と山田雄久を中心としつつこの視点からの近代陶磁器業分析が行われることとなったのである。このうち大森一宏は主に瀬戸や名古屋の陶磁器業の[4]、山田雄久が主に有田陶磁器業の実証分析を深めていった[5]。分析対象時期は昭和戦前期であるが、白木沢旭児（1990）（1992）による瀬戸および名古屋陶磁器業の分析も、この系譜に位置付けることが出来るであろう[6]。また、国家による情報インフラの整備が、多様な産業の成長を牽引したという視点からは、本宮一男（1997）、山田雄久（2003）（2004b）、大森一宏（2003）といった研究が行われた。

このような研究動向を踏まえつつ、宮地英敏は一連の研究によって、高級品生産をしつつ小零細経営を維持した京都、薄利多売の廉価品を生産しつつ小零細経営を続けた東濃（ただし駄知を除く）、経営規模を拡大して中

---

[1] 陶磁器業史に関する研究としては、経済史的な分析の他に、美術史的な分析がある。しかし本稿では、美術史的な分析については立ち入らず、産額や企業経営にまつわる経済史分析に議論を限定することとする。
[2] マルクス経済学でいうところの「小生産」の位置付けについては、宮地英敏（2003a、25-26）および宮地英敏（2008a、7）を参照のこと。
[3] 中村隆英の論考としては、二重構造論を提示した中村隆英（1971）が有名であるが、在来産業論の部分については経済史学界において、特段の注目を集めなかった。この点については宮地英敏（2008、8-9）を参照のこと。
[4] 具体的には、大森一宏（1993）（1995）（1996）（1997）（2003）（2004a）（2008）などがある。
[5] 具体的には、山田雄久（1996a）（1996b）（1996c）（1999）（2004a）（2007）などがある。
[6] 後に、白木沢旭児（1999）にそれぞれ所収。

小企業を中心とする産地へと成長した有田・瀬戸・駄知、近代的な機械制大工業を成立させた名古屋の日本陶器らが、それぞれ当初は棲み分け関係であったものが、第１次世界大戦による陶磁器業の急拡大期に有機的に連関していった様子（複層性）を明らかにしている[7]。

ところが、このような一連の研究の一部を纏めた宮地英敏（2008a）に対して、近世期の陶磁器業を研究する立場からの書評である山形万里子（2010）は、宮地英敏へのみならず、既存の近代陶磁器業史研究全体にかかわる非常に大きな問題提起をおこなった。その該当箇所を引用するならば、「（国内生産額…引用者）の７割から４割は国内で消費されていたことになる。その多くは和食器（磁器・半磁器・陶器）で、磁器製和食器を量産した産地は有田・美濃・瀬戸・九谷・京都などであるが、機械化による均質化、大量生産が不向きな「陶器」の伝統産地として唐津・萩・備前・丹波・信楽・常滑などがあげられる。そのほかローカルな需要をカバーした零細な窯場は全国各地に散在し、現在も続いている」とし、「全国規模で俯瞰すれば産地間での製品と販路の棲み分け」があったと指摘される。そして、「「近代日本陶磁器業」の全体像はより多くの産地を対象とした検討が求められる」との要望が掲げられた。近世の陶磁器業史研究者である山形万里子からすれば、近代陶磁器業史研究が主要産地に特化して行われていること自体が、大きな問題点であると感じたのであろう。

確かに山形万里子が違和感を持つのは当然である。近代における陶磁器業史研究は、経済史学的な文脈で展開してきた事もあり、マルクス経済学の強い影響下から始まったことにそれは起因している。小零細経営から中小企業へ、そして中小企業から大企業へという移行を当然の前提に、その有無や強弱を検証することで陶磁器業史研究自体が始まったためである。それ以後の研究も、マルクス経済学の枠組みからは脱皮しつつも、その分析対象を主要産地に限定するという点では差異がなかったのである。例外的に主要産地以外を分析対象とした研究としては、益子焼を扱った岩下祥子（2000）、常滑焼を扱った大森一宏（2004b）、薩摩焼を扱った渡辺芳郎（2001a）（2001b）（2002）や今給黎佳菜（2010）（2012）などがみられる。しかしそれらの研究もまた、主要産地における分析手法を、その他の産地に応用したものであり、主要産地が成長していく中で淘汰されることなく経営を続けていった産地という、近代における陶磁器産地の多様性を追求する視点からの論考ではなかったといえよう。

以上のような研究史の動向を踏まえ、本稿では、東濃・瀬戸・名古屋・有田・京都といった主要産地が棲み分けや連関をしつつ成長をしていった中にあって、何故にそれらとは距離をとりつつ、伝統的で多様な陶磁器産地が生き残ることができたのかという点を、萩焼を主な分析対象としながら考察していくこととしたい。具体的には、まず第２節において全国的な陶磁器産地の集中度合いを確認するとともに、萩焼の全国シェアも明らかにしておく。続く第３節では、研究史に基づきつつ萩焼の前史を簡単に紹介する。第４節から第７節が本稿の中心的な部分となるが、第４節では明治前半における萩での磁器生産の隆盛とその終焉に向けての動向を考察する。第５節では茶道に基づいて陶器生産が軌道に乗ることとなる様子を確認し、第６節では「一楽、二萩、三唐津」という認識の誕生を歴史的に位置付ける。第７節では、萩焼と陶器生産の関係性のもう１つの側面である民芸について紹介し、おわりにでは課題への１つの答えを導き出すこととしたい。

２．近代日本陶磁器業にまつわるマクロデータと萩焼

近代日本における初めての全国的な統計は、よく知られているように1873（明治６）年および1874（明治７）年に調査された『府県物産表』である[8]。このデータを基にして古島敏雄（1966、138-139）が陶磁器に関する府県集中度を産出しているが、『府県物産表』は記入ミスの多いデータでもある[9]。その記入ミスを修正して宮地英敏（2008a、42）では訂正版の府県集中度を掲げた[10]。それを表１として再掲した。

それによると1874（明治７）年における岐阜・愛知・京都・佐賀の上位４府県の集中度が49.6%、第５位の山口県まで入れた上位５府県への集中度が55.0%である。また、長崎、飾磨（現兵庫県の明石・姫路・龍野などのエリア）、愛媛、名東（現徳島県および現兵庫県の淡路

[7] 具体的には、宮地英敏（2003a）（2003b）（2004）（2005a）（2005b）（2006）（2011）などがある。このうち宮地英敏（2011）以外は再構成をして宮地英敏（2008a）に所収。

[8] 府県物産表については山口和雄（1956、第１章）および古島敏雄（1966、第１篇第３章）を参照のこと。ただし、1873（明治６）年の『府県物産表』は、生産量のデータは記載されるものの、生産額のデータは未記載の場合が多いことと、未記載の府県も多数あることから、統計データの利用としては従来から参考程度に扱われている。

[9] 例えば、『府県物産表』中にみられる博多織のデータの修正を行った論考に宮地英敏（2010）がある。

[10] 具体的には、①岐阜県の重複項目を削除し、②金額が未記入の滋賀県のデータを生産量から推計し、③桁が間違っていると見られる水沢県（現在の宮城県北部から岩手県南部にかけてのエリア）のデータの桁を改めた。

表１　産額上位 10 府県（1874 年）

順位	府県	産額（円）	割合
1	岐阜	141,640.52	21.1%
2	愛知	72,905.14	10.9%
3	京都	65,524.31	9.8%
4	佐賀	52,881.90	7.9%
5	山口	36,093.00	5.4%
上位５府県計		369,044.87	55.0%
6	長崎	24,358.20	3.6%
7	飾磨	21,008.92	3.1%
8	愛媛	17,667.90	2.6%
9	名東	17,450.61	2.6%
10	福岡	15,133.17	2.3%
上位 10 府県計		464,663.67	69.2%
全国計		671,221.01	100.0%

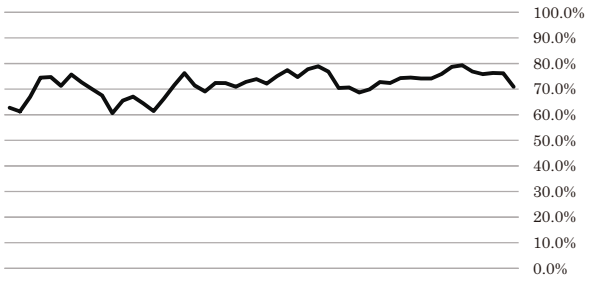
出典）勧業寮編（1875）より作成。
注１）滋賀県の産額が不詳のため、生産量から産額を推計して割り出し、全国産額に組み込んだ。
注２）水沢県の産額は、生産量から推計して桁を一桁改め、全国産額に組み込んだ。
注３）岐阜県のデータは重複項目があるため、重複を除いたデータに改めた。

島）、福岡（ただし旧福岡藩の支配エリア）を含めた上位10府県への集中度でも69.2％に止まっている。宮地英敏（2008a、42）でも言及したように、幕末開港から20年近く経過したこの時点においても、近世期に諸藩で保護育成された陶磁器産地は、地域の陶磁器需要にとって重要であり、地域性が残存していたのである。

『府県物産表』以後に、全国的な統計データが得られるようになるのは、農商務省によって『農商務統計表』が作られるようになる1880年代後半以降のことである。順位の変動は多少見られるものの、1930年代初頭に至るまで愛知・岐阜・佐賀・京都の各府県が上位４位を独占するか、もしくは上位５位以内には入っているため[11]、主要産地である上記４府県の全国に占めるシェアについて図１を作成した。

ただし図１は、佐賀県が上位５位から脱落して以降の分も含め、50年間分のデータを掲載している。これによると、1874（明治７）年には５割ほどであった主要４府県のシェアは、低い年で６割ほど、高い年で８割ほどまで伸びていることが読み取れる。従来の研究史では、このシェアを伸ばしていく上位府県の動向を検証してきたのである。しかしまた同時に図１は、山形万里子が指摘したように、主要４府県以外のシェアが多い年で４割ほど、少ない年でも２割ほどを占め続けていたというように読み取ることも可能であろう。近世期からの連続か断絶かという視点も含めつつ[12]、近代においても淘汰されることのない、多様な陶磁器産地の動向を検討する意義は、この点からも明らかである。

図1　主要4府県シェア

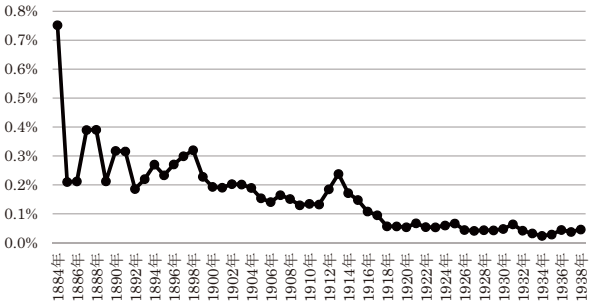


出典）1923年までは各年度版『農商務統計表』、1924年以降は各年度版『商工省統計表』より作成した。
注１）1904年の山梨県の値は明らかな誤植であるため訂正して全国産額に組み込んだ。
注２）1894年の愛知県の値に、名古屋市分が含まれていないので、前後２年間の平均値と仮定して推計した。

続いて、山口県の萩焼の全国シェアを確認しておくこととしよう。先程の表１に基づくと、1874（明治７）年における山口県の陶磁器産額が、全国シェアの5.4％であることをしめしているが、これを萩焼の全国シェアとして読み取ってはならない。なぜならば、山口県内の陶磁器産地は、萩焼産地の阿武郡（萩焼の中でも松本焼・小畑焼の産地）と大津郡（萩焼の中でも深川（ふかわ）焼の産地）のみならず、佐野焼・末田焼・西浦焼・酒垂焼の佐波郡、宮野焼の吉敷郡、小月焼・瀧部焼の豊浦郡、長陽焼の都濃郡、小野田のある厚狭郡などでも、かなりの生産額をほこったためである[13]。

山口県内の陶磁器産額から、萩焼を分離して看取することが出来るようになるのは、『山口県勧業年報』が刊

図2　萩焼の全国シェア



出典）各年版『山口県勧業年報』『山口県統計書』および各年版『農商務統計表』『商工統計表』より作成。

[11] 石川県（九谷焼）または三重県（万古焼および伊賀焼）が、佐賀県もしくは京都府よりも上位の第４位に位置する年もあったためである。
[12] 近世期から近代への連続か断絶かという問題が、研究史上の重要な論点となっていることについては宮地英敏（2014）を参照のこと。
[13] 山口県内務部編（1927、2-4）による。

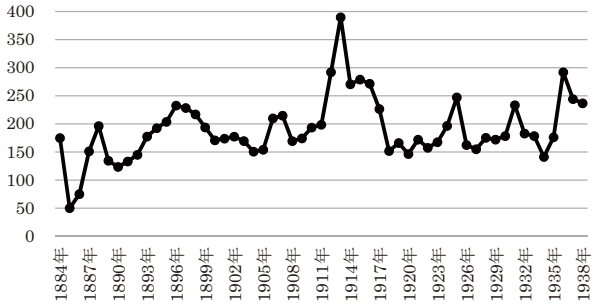
行され、陶磁器産額を掲載するようになった1884（明治17）年以降のことである。その値を、『窯工会誌』および『農商務統計表』にみられる全国データと比較して図２を作成した。1884（明治17）年には全国シェアの0.75％を占めていた萩焼は、いわゆる松方デフレと呼ばれる不況下において、士族授産事業であった南方窯や尚象社の経営が芳しくなくなった1885（明治18）年以降は[14]、全国シェアを0.21％と以前の３分の１程度にまで落としてしまう。その後はやや回復し、1899（明治32）年までは全国シェア0.2％～0.3％台をほぼ推移していたが、20世紀に入るとほぼ0.1％台へと全国シェアを落とし、1918（大正７）年以降はついにそれを下回るようになっていくのである。

また、企業規模という観点からみても、1913（大正２）年のデータで、松本焼（陶器）の10代坂高麗左衛門が雇用職工数7-8名、同じく９代三輪休雪（三輪禄郎・三輪雪堂）が4-5名[15]、深川（ふかわ）焼（陶器）はほぼ家族労働のみ、小畑焼（磁器）の山下工場が雇用職工28名、同じく兼田工場・岡田工場・尾笹工場がそれぞれ10名程度であった[16]。これが昭和初期に至ると、後述するように磁器生産が減少した関係から雇用職工が10名を超えるような窯屋はなくなり、小畑で陶器生産に転じた泉流山（せんりゅうざん）陶器製造所が雇用職工数７名で目立つ程度となる。明治期には雇用職工数５名を超えていた坂窯や三輪窯もまた、雇用職工数を減らしていたようである[17]。

つまり萩焼は、日本陶器や香蘭社といった多くの陶磁器企業が近代的な成長を遂げていく中にあって、その成長の波からは取り残された産地である。しかし一方で、経済成長に取り残されつつも、淘汰されてしまうこと無く力強く生産を続けていくという側面も見られる。図３は、萩焼の生産額を物価でデフレートして作成したグラフである。士族授産企業が経営不振に陥った松方デフレ期の1885-86（明治18-19）年に、萩焼の生産額は落ち込んでいるものの、その後は1890年代半ば、1910年代前半、1920年代半ばなどに山を作りつつも、横ばい乃至は緩やかな増加をみせていたのである。

つまりは、先程の図２で萩焼の全国シェアが下がっていたのは、愛知・岐阜・有田・京都といった産地の成長

図3　萩焼の生産額(指数)



出典）各年版『山口県勧業年報』『山口県統計書』および大川一司他（1967、138）より作成。
注）　1884-6年の３年間平均を100として算出した。

が著しかったためであり、萩焼自体の生産額が急減したわけではなかったのである。萩焼が、日本経済全体の成長と均衡して成長することは確かになかったが、伝統的な生産額を維持しつつ、着実に、地道に、背伸びをし過ぎることのない生産額を維持し続けていた様子を看取することが出来るといえよう。日本経済の急成長とは乖離した、まさしく在来的な存在としての陶磁器業を、そこには見出すことが出来るのである。

３．前史－前近代の萩焼の概説－

本稿では、近代における萩焼の動向を主たる分析対象としているが、第３節ではそれに先立ち、萩焼という陶磁器業の成り立ちについて、その始まりから幕末までの状況を研究史に基づきながら簡単に鳥瞰しておくこととしたい。

15世紀に、足利義政らに同朋衆として仕えた能阿弥（中尾真能（さねよし））によって東山御物が定められた際には、青磁茶碗の名品である馬蝗絆や、天目茶碗の中でも釉が美しい油滴天目茶碗（曜変天目茶碗）に代表されるように、唐物がその中心を占めていた[18]。そして茶を嗜むことやそのための空間もまた、闘茶の系譜に連なる娯楽の場に過ぎなかった[19]。ところが、能阿弥から茶の湯を学んだ村田珠光は、大徳寺の一休宗純から禅も学び、茶の湯と禅の精神との融合を目指していった。そして村田珠光の孫弟子にあたる武野紹鴎が、三条西実隆から和歌を学ぶことにより[20]、茶の湯と禅の精神に、和歌の「侘び」の精

[14] 南方窯や尚象社については不明な点が多いが、橋詰隆康（1973、73）河野良輔（1990）などによる。また、萩市史編纂委員会編（1989、109）には陶益社の名称も見られるが、詳細については不明である。
[15] 熊沢次郎吉編（1929、215）。
[16] 熊沢次郎吉編（1929、223-224）。
[17] 山口県内務部編（1927、29）。
[18] 「馬蝗絆」は三井室町家の三井高大（たかひろ）より寄贈されて東京国立博物館に収蔵されている。また、「油滴天目茶碗」は堺の町衆から徳川家康が購入したものが徳川美術館に収蔵されている。
[19] 義江彰夫（1986、431）。
[20] 桑田忠親（1987）は、茶道にとって、武野紹鴎が三条西実隆から侘び・寂びを学んだことが極めて重要であったことを強調している。

神を組み合わせていくのである[21]。このような茶の湯の変化は、そこで用いられる茶器にも変化をもたらすこととなった。高麗茶碗の初出は、天文18(1537)年の『松屋会記』の記述であるとされているが[22]、織豊期にあたる天正年間(16世紀の第４四半世紀)に入ると、朝鮮半島由来の雲鶴茶碗、三島茶碗、そして井戸茶碗などの陶器が茶会において頻繁に用いられるようになっていく[23]。

このような朝鮮半島由来の茶碗の隆盛をみていた中で、1592(文禄元)年には文禄の役が、1598(慶長３)年には慶長の役が発生した。２度の朝鮮半島への出兵は、「茶碗戦争」などと呼称される事もあるように[24]、朝鮮半島から多くの陶工が日本に連れて来られる切っ掛けとなった。意に沿わぬまま連行された陶工もいれば、当時の朝鮮半島では陶工の地位が著しく低かったため、日本軍の案内役を務めたりして召し抱えられ、日本に連れて来られた陶工たちもいた[25]。

毛利家からは、文禄の役には毛利輝元(毛利元就の嫡孫)が、慶長の役には毛利秀元(毛利輝元の従兄弟、養子)が、それぞれ３万人の兵を率いて参戦した[26]。慶長の役の際には毛利輝元が病に臥せっていたため、養継嗣(ただし、後に毛利秀就が誕生すると相続は固辞)の毛利秀元が代役となったのである。萩焼の開祖となる李勺光・李敬の兄弟は、このような時代状況の中で日本に渡来した。李勺光の子孫とされる山村家(後に改姓して坂倉家となったという)が萩藩に提出した文書によると、豊臣秀吉から毛利輝元へと李勺光が預けられた旨の叙述があるし、李敬の子孫とされる坂家が萩藩に提出した文書によると、毛利輝元が朝鮮半島から召し連れてきたと叙述されている[27]。毛利家によって連れて来られた後に一旦は豊臣秀吉に献上されてから再び下賜されるという形式をとったとみられるが、李勺光・李敬兄弟については、毛利輝元が出兵した文禄の役の際に日本に渡来したと思われる。もう一方の三輪家は、その祖である朝鮮人陶工が、毛利家重臣の宍戸元続(毛利元就の外孫)が朝鮮半島に出征した際に連れて来られ、赤穴内蔵之助を名乗ったのが始まりである[28]。宍戸元続は文禄と慶長の２度ともに出征しているため[29]、そのうちのどちらの時期に連れて来られたのかは確定できない。

李勺光家(山村家)、李敬家(坂家)、赤穴家(三輪家)ともに、関が原の戦いで西軍の総大将を務めた毛利家が周防国・長門国の２ヵ国に減封されると、それに伴って萩へと移り住んだ。そのうち、李勺光の息子である山村光政が、萩城下の松本において萩藩御用窯の惣都合役を命じられた。ところが、山村光政は刃傷沙汰を起こし、1658(明暦４)年に仇討ちで殺されてしまったため[30]、李敬の養子であった坂忠季(２代坂高麗左衛門)へと御用窯の惣都合役は移っていった[31]。一方で、萩の城下で独自に焼き物を焼いていた赤穴家であったが、３代目の赤穴忠兵衛の焼き物が評判となり、藩主の毛利綱広(毛利輝元の孫)の聞き及ぶところとなった。毛利綱広は赤穴忠兵衛を御雇細工人として召し抱えて三輪の名字を与え、京都の楽焼を学ばせたのである[32]。このようにして、萩藩の御用窯は、坂家と三輪家を中心としながら、佐伯(林)家、蔵崎家、赤川家、坂倉家など、いくつかの家が担当して、萩松本および大津郡深川(ふかわ)での茶器としての生産が行われただけであった[33]。そのため、近世期における萩焼の大半(うち松本焼はほぼ全て)は江戸および京での要人・貴人への贈答用として扱われ、萩の城下町で取引されることは殆んど無かった[34]。

このような中、文政６(1823)年には萩藩でも磁器生産

---

21 宮地英敏(2008a、24-25)。
22 石崎泰之(2014、7)。松屋とは武野紹鴎も訪れた奈良の漆問屋のことであり、1534(天文12)年から1650(慶安３)年までの茶会記が残っている。
23 雲鶴茶碗や三島茶碗の登場は1550年代以降のことであるし、楢崎鉄香(1943、38-39)が明らかにしたように、『古織茶会記』や『神屋宗堪日記』の天正年間の記述にすでに井戸茶碗も登場している。
24 萩市史編纂委員会編(1987、640)。
25 楢崎鉄香(1943、29)および佐々木達夫(1991、178)など。
26 中野等(2008、32および193)。
27 萩市史編纂委員会編(1987、640-642)。
28 萩市史編纂委員会編(1987、643)。
29 家臣人名事典編纂委員会編(1989、294)。
30 橋詰隆康(1973、41)。
31 石崎泰之(2014、17)。
32 萩市史編纂委員会編(1987、643)および石崎泰之(2014、23-24)。楢崎鉄香(1943、82)では、三輪家を大和国三輪の出身であり、永正年間(1504-1520)に萩に移住したという説を掲げている。しかし、萩市史編纂委員会編(1983、77)によると、当時の萩は守護大名大内氏の下で益田氏領であったものの、益田氏分家の三隅氏との所領対立が起こっていた。このような不安定な時期に、大和国からわざわざ移り住んできたという由緒の信憑性は薄いであろう。
33 石崎泰之(2014、23)。このうち、坂家・三輪家・佐伯家が萩松本で、蔵崎家・赤川家・坂倉家が大津郡深川で、それぞれ窯焼きに励んだ。
34 萩市史編纂委員会編(1983、674)。

が行われるようになった[35]。磁器生産の技術は、陶器生産の技術と比べて相対的に高温で焼成する必要があり、そのためには石英や珪石といった成分を原料に多く含む必要がある[36]。このため近世期にあっては当初、佐賀藩の伊万里焼や、肥後天草の高浜焼などに磁器の生産は限られていた。ところが19世紀に入る頃には、京の清水焼や[37]、尾張藩の瀬戸焼へと磁器の技術が伝播していった[38]。このような磁器の全国への伝播のうねりの中に、萩藩も加わったのである。萩城下の呉服町に店を開いていた山城屋文蔵が、佐伯家第５代の林宇兵衛へと、大坂の茶碗屋天満屋弥右衛門から紹介された職人を斡旋したのが、萩小畑における磁器生産の始まりといわれている[39]。

以上のようにして近世期には、萩松本および大津郡深川では陶器の、萩小畑では磁器の、それぞれ萩藩の御用窯としての生産が行われたのである。

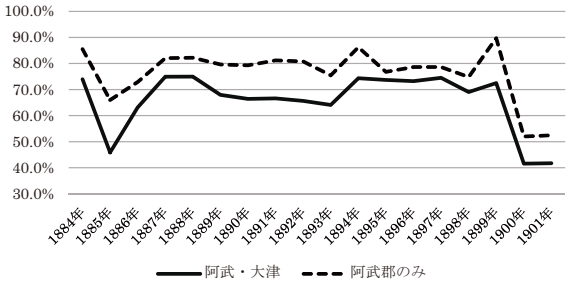
４．明治期における磁器生産の隆盛と停滞

明治期にはいって長洲藩の御用窯としての保護を失うと、萩焼は独力での展開を目指さざるを得なくなった。そのような中で、明治前期の萩焼の中核を担ったのは萩小畑における磁器生産であった。原料の粘土は小畑産の分解岩石が用いられており、弱火性の字梶山のものと強火性の字中仙道のものを混ぜて用いられた。このため、有田などで主に用いられていた天草石を使用した場合と比べて、粘力の強い粘土であった。これを、脚車と呼ばれる蹴轆轤（けろくろ）を用いて成形し、登り窯で焼成した[40]。

その生産額であるが、統計の数値が判明する1884（明治17）年をみてみると、萩焼における磁器と陶器の比率は、なんと阿武郡内だけでは85.5：14.5、大津郡を含めても73.9：26.1となっている。それ以降の割合も含めて図４を作成した。現在は茶陶として名高い萩焼であるが、明治中頃の生産高はその過半を磁器が占めていたのである。

後述するように、幕末から明治期に入って茶道が停滞したこともあり、陶器生産のウェイトが下がったと見られるのに対して、磁器生産は順調であった。士族授産事業が失敗した1885（明治18）年に磁器割合が一旦は低下するが、すぐにウェイトを戻し、19世紀中は萩焼の６割から７割５分を、阿武郡に限定するならば７割から９割弱を、磁器の生産が占めていくのである。阿武郡および大津郡という萩焼全体で陶器生産が磁器生産を凌駕するのは、1900（明治33）年のことであった。それに前後して、小畑においても陶器生産が増加していくことと、萩の内部における松本と小畑を分離した統計データがなくなるため、残念ながら磁器と陶器の割合は不明となっていってしまう。しかしこの後は萩における磁器生産について言及されることは少なくなっていくため、現在にまで至る陶器生産だけの萩焼という特徴は、おおよそ世紀転換期に出来上がっていったと考えてよいのではないであろうか。

図4　磁器生産の比率



出典）各年版『山口県勧業年報』『山口県統計書』より作成。
注）　1893（明治26）年までは陶器と磁器の分類に従った。1894（明治27）年以降は書式が変更され、地域区分しか記述されていないため、大津郡と阿武郡萩松本を陶器、阿武郡萩小畑を磁器としてデータを連続させた。そのため、1894（明治27）年以降のデータは磁器の割合が若干高く出ていると思われる。

続いて萩の磁器生産について、その詳細を確認していくこととしよう。明治4-5（1871-2）年頃には、萩小畑における徳利生産がみられ始めたが、これは京都へと販売され、炭酸水を詰めて密閉されて用いられたという。この徳利はその他にも、兵庫県の灘の清酒メーカーである櫻正宗および菊正宗、山口県下の柳井の醤油メーカーや、大阪の醤油メーカー用などでも用いられた[41]。この中でも、炭酸水の密閉に適しているという特性から、京都ではさらにビール瓶用としての磁器の使用がみられはじめた。京都では、1883（明治16）年に鮫島盛らによって盛ビール製造所末広社が設立され、「盛麦酒」を始めとするブランド等でビール販売を行った。1885（明治18）年にはニューオリンズ万国博覧会で、同社は金牌を受賞している。これを受けて1886（明治19）年にブランドを「扇ビール」と統一し、「万国一等扇麦酒」のキャッチフ

35　萩市史編纂委員会編（1987、647）。
36　宮地英敏（2008a、23）。
37　岡桂子（2011、295）。
38　森谷尅久（1984、206-207）。
39　萩市史編纂委員会編（1987、647）。
40　熊沢次郎吉編（1929、219-220）。また、轆轤に関して、蹴轆轤と手轆轤の地域分布を説明したものに宮地英敏（2008b）がある。
41　熊沢次郎吉編（1929、223）。

レーズの下で販売を手がけた[42]。萩小畑からはこの末広社の麦酒に対して、盛んにその酒ビンとなる徳利を供給したのである[43]。

ところが以上みてきたような明治中期までの萩焼における磁器生産の隆盛は、次第に下火になっていくこととなった。その理由は３つある。一つ目の点は、磁器生産の量産化のためには、下絵付（釉下彩）の技術革新が重要な役割を果たしたことである。素焼を終えた後の素地に呉須やコバルトなどで藍色系統の絵付けをする下絵付は、伝統的には絵筆を用いて手描きで行われてきた[44]。ところが、人の手描きではその生産量に限界があるため、代表的な磁器の生産地である岐阜県東濃地方の美濃焼などでは、明治期に入ると下絵付を量産化に適したように改良を加えていく。1880年代前半の東濃では型紙を用いた下絵付が盛んに行われたし、同後半に入ると銅版印刷によって転写紙（印刷紙）を作り、それを素地に乗せて絵柄を転写させる下絵付の技法が普及した[45]。一方で萩焼では、磁器の量産化のために重要であった銅版印刷を、産地内に導入することができなかった。それどころか、転写用の「（銅版･･･引用者）印刷紙は美濃より購入」していたのである[46]。当然、東濃で作られた印刷紙を購入していては、流行のデザインを即座に取り入れることもできないし、何よりもコストが高くならざるを得ない。銅版印刷を用いた廉価な磁器というマーケットにおいて、競争すべき東濃に道具生産を頼ったこと自体が、萩における磁器生産の限界であったといえよう。

二つ目の点は、成形工程における均一化にも対応しなかったことである。明治の陶磁器業において磁器の生産が急増した理由は、国内向けというよりも輸出向けの生産が大きかったことによる。当初は、ジャポニスムブームに乗って欧米へ[47]、後には欧州製陶磁器を購入できないアメリカの中下層へ、明治日本の磁器はよく輸出されていった[48]。このアメリカ向け輸出によく対応し得たのは愛知県瀬戸の陶磁器業者らであった。アメリカ市場ではティーカップ等が２個ペアもしくは５個セットで取引されており、それらの均一性が重要であった。しかも、ペアやセットのうちの一部が破損した場合には、それらを買い足すという消費行動も行われていたため、尚更、大量の均一製品を作ることが求められたのである。

瀬戸では、この均一性を、石膏型における形成方法を導入することで対応していた[49]。ところが萩焼では、磁器の均一性を担保してくれる型での形成において、「型物は僅少とし素焼型を用ふ」という状況であった[50]。そもそも萩では蹴轆轤による成形が中心のままであったし、型成形を行う場合にあっても、石膏型ではなく素焼型を用いていた。石膏型を用いた型成形は、型に泥漿を流し込む「鋳込み」が主流となっていったのに対して、素焼型を用いた型成形は、型に粘土を当てて叩いてつくる「型おこし」である[51]。このため、蹴轆轤を用いた伝統的な成形法や、素焼型を用いた成形法では、石膏型を用いたときのような均一性を作り出すには不充分であり、明治期の磁器にとって重要な市場であったアメリカ市場には対応できなかったといえよう。

三つ目の点は、窯の問題である。近代の日本陶磁器業では、高級品路線の磁器生産においても、廉価品生産の磁器生産においても、ともに石炭窯が導入された。従来の登り窯では燃料焼却灰が器物に触れてしまうため、欧米向けの純白さを要求される高級品のためには不適であった。また同じく従来の登り窯では、近隣の森林伐採によって燃料となる薪材の価格が次第に高くなっていったために、廉価品生産の面では燃料コストの高さが問題であった。このため、高級品生産においては純白さのために、廉価品生産においては燃料コストの削減のために、それぞれ石炭窯へと転換していったのである[52]。ところが萩小畑における磁器生産では、山下･兼田･岡田･尾笹といった生産者は、すべて丸窯形式の登り窯をそれぞれ１つ有していただけであった[53]。登り窯を用いた焼成のままでは、欧米向けの高級品生産としての発展も、国内やアジア向けの廉価品生産としての発展も、ともに困難であったといえよう。

---

42 吉田元（2011、828）。
43 熊沢次郎吉編（1929、223）。
44 佐々木達夫（1991、41）。
45 多治見市（1987、1346-1347）。銅版印刷の技法とは、銅版に、蜜蝋とアスファルトの混合物である防蝕剤を塗り、その上から鉄筆でエッチングのように画線を描き、防蝕剤を削り取って塩化第二鉄や硫酸銅の液に浸して腐食させて凹版をつくった。そしてその銅版の凹部に呉須やコバルトといった絵具を擦り込ませ、印刷紙をのせて印刷した。
46 熊沢次郎吉編（1929、221）。
47 宮地英敏（2008a、46-54）。
48 宮地英敏（2008a、140）。
49 宮地英敏（2008a、147-151）。
50 熊沢次郎吉編（1929、220）。
51 多治見市（1987、1284-1286）。
52 宮地英敏（2008a、第６章および第８章）。
53 熊沢次郎吉編（1929、220）。

以上のように３つの点で近代的な産業としての磁器生産が困難であった萩焼としては、残された磁器生産の道は有田と同じ高級な国内市場向けの生産であったであろう。登り窯で用いられていた薪材が「松薪のみ」という状況であり、比較的価格の高い薪材が用いられていたことからも、焼成技術を変えない限りにおいては、国内向けの高級品路線しか選択肢は無かった[54]。ところが、萩の磁器生産にとっては有田と同じ選択は無理であった。それは原料となる粘土に起因する。本節の始めに述べた萩近傍の粘土は、「原料は豊富にして低廉なるも上等ならず」ということで[55]、泉山陶石天草陶石などを用いて高級磁器生産に邁進していた有田焼などとは、競争する余地が無かったといえる。こうして、萩焼における磁器生産は、明治初頭から中頃にかけての隆盛が忘れ去られるかのように、次第に減少していったのである。

５．茶道の盛衰と萩の陶器生産

前節で分析したように磁器生産が停滞していくのと入れ替えに、萩焼においては再び陶器生産がその中心へと躍り出ていくことになる。近世来、吉敷郡大道村の大道（だいどう）土をベースとしつつ阿武郡福栄村福井の金峰（みたけ）土か小畑土を少量混ぜると、茶器用のよい原料粘土となっていた[56]。そして陶器産地という側面は、現在にまで至る萩焼の特性ともなっている。本節では、茶道の歴史的な変転を踏まえた上で、萩における陶器生産が明治期以降も生産を伸ばしていく様子を分析する。

茶道の歴史においては、村田珠光から茶の湯を習った藤田宗理・十四屋（もずや）宗陳・十四屋宗伍がそれを武野紹鴎へと伝え、さらに武野紹鴎から千利休（1522-1591）へと伝えられていった。先述のようにその際、武野紹鴎は茶の湯のみならず、和歌をも学んで茶の湯の精神性を高めている。そのため、織豊期に千利休が大成させた茶道とは、「侘び」の精神を中核に据えるものであった[57]。千利休自体は様々な高麗茶碗を好んだが、一般的には、大井戸茶碗「宗及」[58]、井戸茶碗「大高麗」[59]、大井戸茶碗「有楽」[60]、大井戸茶碗「喜左衛門井戸」[61]、青井戸茶碗「柴田」[62]というように、井戸茶碗が広く好まれた。しかしそのような地味な「侘び」の茶道を追及していく中で、千利休は太閤となった豊臣秀吉の勘気を蒙ることとなり、1591（天正19）年に切腹を命じられてしまった。千利休には嫡男の千道安と娘婿の千少庵がいたが、千利休の切腹の後には両者とも蟄居となった。こうして、千利休が大成させた茶の湯ではあったが、千利休死後には千家の影響力は後退してしまったのである[63]。

変わって登場したのが、利休七哲の一人であった古田重然（しげなりorしげてる）（通称、古田織部）である[64]。古田織部は、千利休から学んだ「侘び」の茶の湯ではなく、自身も３万５千石の領地を持つ大名であったことから、意表をついた派手好みな茶の湯を好んだ[65]。これが豊臣秀吉の気に入るところとなり、津田宗及の死去や今井宗久の高齢もあって、古田織部は豊臣家の茶頭に任じられた[66]。その後の古田織部は、領地を息子へ譲って３千石の隠居料にて茶道に興じていたが、関が原の戦いでは東軍に属して戦った。このため、７千石を加増されて１万石の隠居料となるとともに、徳川秀忠の茶道師範に任ぜられることとなったのである[67]。こうして古田織部は、千利休切腹後の豊臣家の茶頭から関が原の戦い後の徳川家の茶道師範という地位に身を置きつつ、武家・公家・寺社・商人の間を縦横無尽に往来し、「侘び」の茶から洒脱な大名茶

54　熊沢次郎吉編（1929、220）。
55　熊沢次郎吉編（1929、224）。
56　熊沢次郎吉編（1929、213）。
57　桑田忠親（1987、89）および水林彪（1987、195-197）など。また、「侘び」とは素朴で日常の中にある美的なものであり、「寂び」とは古びて静かな状態のことであるが、当時は「侘び茶」と呼ばれるように「侘び」が茶道を表す用語であった。
58　根津美術館蔵。津田宗及から蜂須賀家へと販売されたことで知られる。
59　徳川美術館蔵。安宅冬康から徳川家康の手に渡り、尾張徳川家のものとなった。
60　東京国立博物館蔵。織田信長の弟であり、有楽斎の号を持った織田長益が所持していた。後に茶人でもあった松永安左ヱ門より東京国立博物館へ寄贈された。
61　孤蓬庵蔵。大阪の竹田喜左衛門が所有していたが、その後は所有者が転々としていた。島根松江藩主で茶人であった松平治郷（松平不昧）も所有者であった。
62　根津美術館蔵。織田信長から柴田勝家に与えられたといわれる井戸茶碗。
63　桑田忠親（2004、305-312）。
64　千利休の高弟七人を示す利休七哲には、古田重然の他に、会津若松城主となった蒲生氏郷、熊本城主となった細川忠興、高槻城主でキリシタン大名の高山長房（高山右近）、豊臣秀吉の御伽衆を務めた芝山宗綱、豊臣秀次と昵懇であった瀬田正忠、稲葉一鉄の孫で伊勢岩出城主の牧村利貞がいた。
65　桑田忠親（1987、129-137）および桑田忠親（1990、210-237）。また、古田織部については、山田芳裕『へうげもの』講談社（2014年時点で19巻まで既刊、もとは『モーニングKC』に掲載）およびNHKによるアニメ化によって昨今注目が集まっている。
66　桑田忠親（1987、123-126）および桑田忠親（1990、62-66）。
67　桑田忠親（1987、123-126）および桑田忠親（1990、80-85）。

への転換を促していったのである。古田織部の好んだ茶碗は、美濃国でつくられた志野・織部・黄瀬戸などであり[68]、千利休の好んだ茶器と比べて遊び心の多いものであった。

古田織部は、1615（慶長20）年の大坂夏の陣の直前に、家臣が豊臣家に内通したとして逮捕され、夏の陣後には古田織部自身も逮捕切腹を命じられた。息子もこれに連座し、大名家としての古田家は滅亡した[69]。しかし、古田織部の後に茶道の中心に躍り出たのは、古田織部とも親交が厚く庭園作りで名を成した小堀政一（通称、小堀遠州）や[70]、古田織部の曾孫弟子にあたる片桐貞昌（通称、片桐石州）であった[71]。小堀遠州は近江国小室１万５千石の、片桐石州も大和国小泉藩１万３千石の大名である。そのために両者とも、千利休の流れを汲む「侘び」の茶よりも、古田織部の好んだ大名茶を推奨し、これが近世期を通じての主流的な茶道になっていったのである。片桐石州は、徳川光圀や保科正之らの茶道の師匠となったのをきっかけに、四代将軍徳川家綱の茶道師範となった。これ以後、徳川将軍家の茶道は片桐石州の流れを汲む石州流となったため、多くの大名へと影響を与えたのである。

一方の千家は、千利休と対立していた嫡男の千道安ではなく、娘婿であった千少庵が継ぐこととなった。しかし、千利休の没後に零落していた千家の生活は苦しく、千少庵の息子で千利休の孫にあたる千宗旦は、「乞食宗旦」と呼ばれるほどに貧困に喘いでいた時期もみられたのである。このような中で、千家の茶道は「侘び」を極めて「侘び茶」として完成していった[72]。千宗旦の子ども達によって、表千家・裏千家・武者小路千家の三千家が成立したことはよく知られるところである[73]。千利休の曾孫世代にあたる三千家は、表千家の千宗左（江岑宗左・逢源斎）が紀州徳川家の、裏千家の千宗室（仙叟宗室・臘月庵）が加賀前田家の、武者小路千家の千宗守（一翁宗守・似休斎）が高松松平家の茶頭を務めるなどして、次第に貧困状態からは脱していった。しかし、千利休が豊臣秀吉から３千石を賜っていた時代と比べると、その10分の１に満たない禄を受けるのみであった。諸藩の茶頭としての用務は、時折領国に指導のため出かけていくだけであり、そのため三千家とも普段は京に拠点を置いていた。こうした中で三千家は、家元制度を作り上げて庶民からの集金システムを構築していくこととなるが、火災がおこるごとに茶室や家屋の復旧に資金が必要となるなど、近世期を通じて三千家の台所事情は厳しかったのである[74]。

さて、以上のような状況を踏まえた上で、萩において行われた茶道を確認しておこう。長州藩四代藩主の毛利吉広の代（1694-1707）までは、毛利輝元以来の千家流の茶道が行われ、河上家・安家・竹内家・山崎家・嶋家・末近家・荒川家・宮原家・竹田家・津田家・兼常家といった御茶堂役の家があった。特に兼常家の兼常徳斎は、表千家の四代千宗左（江岑宗左）より直接茶を学んだ人物であった。ところが、毛利吉広の没後に支藩長府藩嗣子の毛利元倚を五代藩主として迎えると、御茶堂役の宮原家に石州流を学ばせるとともに、新たに飯田家を石州流の御茶堂役として召し抱えた。さらに、毛利家六代藩主が早世すると末期養子をもって支藩長府藩主の毛利重就を七代藩主に迎え入れ、彼によって川上不白による江戸千家流が導入され、御茶堂役の竹田家が流儀替えをした。こうして毛利家の茶道には、表千家・石州流・江戸千家流の御茶堂役がそれぞれいるという状況であったが、大名茶に染まらずに千家流の茶道が中心であったといえよう[75]。

このような縁もあり、幕末の討幕運動の際には、十一代千宗左（瑞翁宗左・碌々斎）は長州藩の志士達を匿い、北野天満宮での謀議に加わったという[76]。父親の十代千宗左（祥翁宗左・吸江斎）が40代で隠居・死去したため、20代で表千家を継いだ十一代千宗左は、幕末の動乱の中で積極的に勤皇の志士達に関わっていったのである。

---

68 志野焼・織部焼・黄瀬戸焼などの古陶器は、従来、愛知県の瀬戸地域で製作されたと思われていたが、1930（昭和5）年に陶芸家の荒川豊蔵が岐阜県可児郡久々利村（現可児市）で大萱古窯跡で古陶器の陶片を発見し、それらが美濃国で作られたことが判明した。詳しくは北大路魯山人（1933）（後に平野雅章編1980に所収）を参照のこと。

69 桑田忠親（1990、176-191）。

70 桑田忠親（1987、137-140）。小堀遠州は二代将軍徳川秀忠から三代将軍徳川家光にかけての時期の将軍家に対する茶道師範の地位にあった。

71 桑田忠親（1987、172-183）。千利休の嫡男である千道安は、父に反発して古田織部の茶を学んだ。この千道安の弟子に桑山宗仙がおり、片桐石州は桑山宗仙より茶の湯を教わった。

72 桑田忠親（1987、163-167）。

73 表千家不審菴「三千家分立」http://www.omotesenke.jp/list3/list3-3/list3-3-3/；裏千家今日庵「裏千家歴代」http://www.urasenke.or.jp/textb/spirit/spirit4.html；武者小路千家官休庵「千家と官休庵の歴史」http://www.mushakouji-senke.or.jp/history/。

74 桑田忠親（1987、202-208）。

75 萩市史編纂委員会編（1987、681-687）。

76 千宗左（1988a、3）。

しかし、江戸幕府が倒れて到来した明治という時代は、表千家をはじめとする千家にとってはかえって経済状況を悪化させることとなった[77]。表千家でいうならば、第四代千宗左（江岑宗左・逢源斎）以来の関係であった紀州徳川家との繋がりが切れ、二百石の禄高さえも失ってしまった[78]。このため、明治のはじめには塗炭の苦しみを味わうのである。

こうした中で、萩の豪商であり、維新の志士達にも資金援助をしていたことでも知られる熊谷家六代目の熊谷（くまや）五一が[79]、1874（明治７）年４月３日に京都に赴いた[80]。京都では、安政の大獄で永押込となった山科正恒（山科白雲）や[81]、高杉晋作らと交流のあった儒者である加藤熙（ひろし）（加藤有隣（ありちか）・桜老）、平野神社の権禰宜であった白上雅一といった尊皇家・勤皇家たちと交流を持つ一方で[82]、茶会などにも顔を出している。そのような中で懇意となった表千家の十一代千宗左（瑞翁宗左・碌々斎）に、直々に入門することとなったのである[83]。熊谷家では、代々の当主が好みの流派に師事して茶道に親しんでおり、隠居をして京都に滞在していた六代目の熊谷五一は表千家を選択したのであった[84]。入門後には千家との蜜月関係を築き上げ、十一代千宗左の兄弟である高田久田家の久田宗悦（玄乗斎）や武者小路千家の八代千宗守（一叟宗守・一指斎）であるとか、当時の茶道界の長老でもあった裏千家の十一代千宗室（精中宗室、玄々斎）、楽焼の十一代樂吉左衛門（楽慶入）、表具師の九代奥村吉兵衛、指物師の十一代駒沢李斎、袋師の七代土田半四郎（七代土田湖流・聴雪）、金工の後藤一乗（後藤光代）らとの親交も暖めた[85]。

1875（明治８）年５月、熊谷五一は１年ぶりに萩へと戻ることとなった。この際、事情は不明であるが、十一代千宗左が十一代樂吉左衛門を伴って、熊谷五一の後を追うように萩を訪ねることとなった[86]。この時のことについて十一代千宗左の曾孫にあたる十四代千宗左（而妙斎）は、「生活を立てるのさえ苦しい日々が続き、地方の素封家の好意に甘んじざるを得なかったのだと思います」と述べている[87]。十一代千宗左らの100日間ほどの萩滞在中に、多くの旧長州藩士たちが表千家に入門している[88]。また、十一代千宗左らが萩を離れた直後の熊谷五一の日記には、萩松本の坂高麗左衛門宅で「陶器一見盃類買得」た際に、「樂慶入香合類出来」という状況だったという記述が残っている[89]。十一代樂吉左衛門が八代坂高麗左衛門のところで茶の湯の際に用いる香合を作ったものの、それが窯で焼きあがる前に、十一代千宗左とともに萩を離れたため作品が残ってしまった様子が読み取れる。萩の熊谷家（熊谷美術館）には十一代樂吉左衛門作の器も残されており、萩焼に触発された創作活動を看取できる。

また十一代千宗左は、1882（明治15）年10月に再び萩を来訪した。今回は、袋師の土田湖流（七代土田半四郎の弟）を伴っての行程であった。今回は１ヶ月程の滞在期間であったが、その間に何人もの表千家への入門者を出している。また、萩松本の八代三輪休雪（三輪雪山・三輪泥介（どろすけ））は、土田湖流に入門して袋作りにも取り組み始めることとなった。この萩再訪に際しては、十一代千宗左が御点前を指導した際の３回分の授業料が、領収書より判明する。それによると、20人を相手とした指導１回で12円50銭、10人の場合には10円、５人の場合に

77　裏千家やその他の茶人の貧困については熊倉功夫（1980、159-164）にも詳しい。
78　千宗左（1988a、3）。
79　田中助一（1967a、77）。
80　熊谷五一が京都へ赴いた目的は分かっていないが、田中助一（1967a、77）によると、熊谷五一は京都で松園家に逗留したという。幕末の関白であり英照皇太后（孝明天皇女御）の父親であった九条尚忠が子沢山であったため、庶子の一人が隆芳という名で大乗院門跡となっていた。しかし明治初めに廃仏毀釈が起こり、隆芳は還俗することとなったため、松園尚嘉として新しく松園家を設立することとなった。松園家としては創立早々であったため、萩の豪商であり、維新の志士をはじめとして各所に資金を散布した熊谷五一の資金力を頼ったのではないかと推察されるが、詳細については不明である。
81　紀姓山科家の御蔵小舎人（内蔵寮の雑用職）であったが、尊王攘夷運動のために安政の大獄では永押込と処断された人物である。
82　白上雅一は、信州の浅間神社の禰宜となるために1874（明治７）年９月７日に京都を離れてしまうが、同年９月12日に熊谷五一は平野神社の禰宜に任ぜられたという。ただし、二十二社のうちの上七社の１つである平野神社の禰宜は極めて格式が高く、祭祀でも重要な役割を果たすため、実際の祭祀を行う禰宜に任ぜられることは不可能だったであろう。この際に熊谷五一が任ぜられたのは、名誉職としての特別な禰宜であったと思われる。
83　田中助一（1964a、78）。田中助一は、『茶道雑誌』において全６回に亘り、1874（明治７）年から1881（明治15）年にかけての日記の記述のうち、茶道関係の記述の復刻と解説を行っている。
84　熊谷五右衛門（1993、25）。
85　田中助一（1964a）、田中助一（1964b）、田中助一（1964c）。
86　千宗左（1988b、2）では、この際に袋師の七代土田半四郎も同道したとの紹介がなされており、熊谷美術館（http://www3.ocn.ne.jp/~kumaya/omote_kuma.htm）などでも、これに基づいた説明がなされているが、田中助一（1964c）の十一代千宗左の萩訪問時の熊谷五一の日記からは、七代土田半四郎の同道については確認できない。
87　千宗左（1988b、3）。
88　田中助一（1964c）。
89　田中助一（1964d、31）。

は４円50銭であった。どのような明細で授業料が決められていたのかは不明であるが、３回で27円の指導料が発生している[90]。１ヶ月の滞在中にどれほどの回数の指導が行われたかは不明であるが、十一代千宗左は萩再訪でかなりの指導料を受けることが出来たといえよう。

以上のように、維新期から明治前半期にかけての表千家が最も困窮に喘いでいた時期にあって、萩の豪商であった熊谷五一の協力は、表千家および楽家・土田家などの千家十職にとっても大きな意味を持っていた[91]。そしてこれに前後して、萩焼の茶の湯での地位が向上していくこととなる。齋藤康彦は、明治期に入って安田善次郎や益田孝・益田克徳・益田英作の３兄弟、さらには馬越恭平らなどの実業家達が、旧大名や旧公家といった華族層とともに茶会を開き、「近代数寄者のネットワーク」が作られ始めたことを指摘する[92]。こうした茶道ブームの中で[93]、一方では財界人たちは大名物（おおめいぶつ）・中興名物と呼ばれるような名だたる茶器の蒐集に走るが、一方では手軽で使いやすい新しい茶器の購入も多くの人々によって広く行われていくこととなるのである。

明治20年代には萩焼とは「茶用の飲食器及ひ雑器を製す」ものであると指摘されているし[94]、1901（明治34）年に開催された第１回全国窯業品共進会では、萩の九代三輪休雪（三輪禄郎・三輪雪堂）の抹茶茶碗が「其雅到他に及ぶものなく、陳列の当日早くも売れ行き、陳列箱中空位のもの多し」という人気振りであった[95]。1904（明治37）年の第５回内国勧業博覧会でも「萩焼は元来主として茶式用品を製造する者なるを以て其の工作一種の妙味を有す」と指摘されている[96]。このようにして、第４節で見たように明治前半期には磁器生産のほうが多かった萩焼に、古来茶器である陶器だけを作り続けてきたようなイメージが付与されるようになっていったのである。大正期に入るとこのイメージは固定し、『明治工業史（化学工業篇）』では、「萩の附近なる松本に萩焼あり、又其の近地に深川焼ありて共に朝鮮風の軟陶を出せるが、要するに茶器類に限られ（ママ）。」というように[97]、萩においてかつて磁器が生産されていたこと自体が捨象されてしまったほどである。

６．一楽、二萩、三唐津

さて、以上のように茶道と密接な関係をもって語られるようになった萩焼であるが、萩焼を指し示す言葉に「一楽、二萩、三唐津」というものがある。茶の湯、特に千家の茶道で使われる茶器として、楽焼、萩焼、唐津焼が好まれていることを意味している。しかし、巷間において昔から言われてきたという「一楽、二萩、三唐津」であるが[98]、果たしていつから使われ始めたのかという点に関しては、これまで検証がなされてこなかった。この点を明らかにしていくこととしよう。

千利休以来の「侘び」茶の精神を体現している茶器として、「一井戸、二楽、三唐津」という表現がもともとはあった。千利休の高弟であり北条長綱（幻庵）に仕えた山上宗二によって記された『山上宗二記』に、「一井戸茶碗是天下一ノ高麗茶碗、山上宗二見出テ名物二十関白様ニ在リ」という記述があったことでも知られる[99]。武野紹鴎から千利休の時代へと続く茶の湯の世界では、井戸茶碗こそが最高の茶器として評価され、それに利休好みの楽焼や、高麗茶碗系統の唐津焼が続くという価値観であった。「一井戸茶碗是天下一」という価値観が最初にあった上で、いつしか「一井戸、二楽、三唐津」という語呂の良い表現が作り上げられていったのであろう[100]。

しかし、明治期に至っても「一楽、二萩、三唐津」という表現は見られない。例えば、1890（明治23）年の『陶器小志』の「萩焼」の項では、２頁にわたって近世期の萩

---

90 田中助一（1964e）。

91 千家十職とは、先述の楽焼の楽家、表具師の奥村家、指物師の駒沢家、袋師の土田家に加えて、焼物の西村（永楽）家、竹細工師の黒田家、金物師の中川家、釜師の大西家、塗師の中村家、細工師の飛来家がある。

92 齋藤康彦（2012、第1章）。

93 熊倉功夫（1980、164）では、明治期における茶道の復活について、「明治中期以降のナショナリズムの抬頭にともなう伝統文化への人々の注目」や「礼法としての茶の再発見」とともに、「茶道のパトロンとして、旧大名層にかわる財界人が急速に成長したこと」を挙げている。

94 古賀静修（1890、36）。

95 内藤道太郎編（1902、出品の概況）。

96 内藤道太郎編（1905、18）。

97 日本工学会編（1925、365）。

98 例えば、石崎泰之（2014、3）では、「はじめに」のところで「「一楽、二萩、三唐津」と謳われる」と文章を書き始めているし、谷晃（2012、8）では、「いつ頃からいわれ始めたのかわからないが「一楽　二萩　三唐津」という言葉がある」と記述されている。

99 橋詰隆康（1973、11）他多数。

100 「一井戸、二楽、三唐津」は、「イチ○○、ニ○○、サン○○○」というリズムであるが、同様のものに「一富士、二鷹、三茄子」がある。後者は18世紀初頭には既に江戸で良く知られていた初夢の縁起物であり、それと似た「一井戸、二楽、三唐津」も同時代に作られたのではないかと推測される。

焼についての解説がされているが、ここにはそのような表現は登場していない[101]。1894（明治27）年の金森得水『本朝陶器考証』でも、２頁にわたって長戸国の「古萩窯」についての解説を書いているが、「一楽、二萩、三唐津」という表現は登場しない[102]。明治30年代に開かれた共進会や博覧会にまつわる報告書類、1913（大正２）年の北村弥一郎による萩焼（松本焼・深川焼・小畑焼）の調査、先述の1925（大正14）年の『明治工業史』、さらには1927（昭和２）年の『山口県ノ窯業概況』にすら、「一楽、二萩、三唐津」という表現は登場していない。この萩焼を象徴する「一楽、二萩、三唐津」という表現を辿っていくと、管見の限りでは、なんと1932（昭和７）年に小野賢一郎によって編纂された『陶器全集』の第14巻が初出である。

小野賢一郎とは、福岡県出身で若い頃は小学校の代用教員をしていたが、大阪毎日新聞（後に東京日日新聞と合併、現在の毎日新聞の前身の一つ）に入社して記者として活躍したジャーナリストである。しかし同時に、俳句や小説などの創作活動に親しんだ人物でもあり、小野蕪子の俳号でも知られる[103]。小野が編集に携わった『陶器全集』は、民友社から発売された全25巻の大シリーズである。この当時の民友社は、徳富蘇峰の著書を主に刊行する出版社であった。1929（昭和４）年に徳富蘇峰が根津嘉一郎に追い出される形で国民新聞社を退社し、大阪毎日新聞（東京日日新聞）へと移籍をしている。その御礼もあって、そこの社会部長などを務めた有力者の小野賢一郎へ、『陶器全集』の刊行の責任者を促したのであろう[104]。小野賢一郎は、1925（大正14）年にはじめて陶磁器についてまとめた『陶器を試みる人へ』では、「私自身「試み」つつある今、（中略）どこまでも初心の頼りなさ、さびしさから、話しかけてみたまでである」と述べている[105]。素人ながらに新聞記者の筆力をもって陶器評論をした小野賢一郎は、その後も、『陶器を中心に』『やきものの話』『陶心俳味』と６年間で３冊の陶磁器関係のエッセイ集を刊行している[106]。このようして、新聞記者による素人の横好き程度の陶器評論をしていた小野賢一郎が、徳富蘇峰の協力を得る事により一躍社会に躍り出ていったのが『陶器全集』であった。

『陶器全集』において、「一楽、二萩、三唐津」のフレーズが登場するのは第14巻であるが、この巻には「楽陶工伝」のタイトルが付されている。そして該当箇所では、「楽茶碗ほど抹茶に打込んだものは無いとは古来の至言である」ということで、薄茶や濃茶を飲む際の楽茶碗の素晴らしさを述べ、「されば古へから一楽二萩三唐津といつて楽を其第一に据えてゐる」と締めくくっている[107]。楽焼を一番であると褒め称えるフレーズとして、「一楽、二萩、三唐津」という表現が使われたことが分かる。『陶器全集』第14巻が刊行された直後に小野賢一郎が個人で執筆した『茶碗の見方』でも、「茶の湯では一楽、二萩、三唐津と称して、楽焼が一番茶には向いてゐるとしてゐる」と解説している[108]。

一方で、小野賢一郎が『陶器全集』以前に執筆した書籍では、楽焼や萩焼を扱っていても同様の表現は登場していない。『陶器全集』は１冊が数十頁の分量であるとはいえ、３年間で全25冊が刊行された大シリーズである。小野賢一郎本人、もしくは彼の下で編集にあたった者が、その情報収集の過程で「一楽、二萩、三唐津」かそれに類するフレーズを集めたのであろう。こうして、第５節で考察したように明治期に十一代千宗左や十一代樂吉左衛門らによって茶道界と深く結縁を付けられた萩焼は、茶道界で好まれるとともに、昭和期の初頭に小野賢一郎らによって世に出されたキャッチコピーまでもを入手することとなったのである。

ただし依然として、小野賢一郎らも萩焼を紹介する際には「一楽、二萩、三唐津」のフレーズは使用していない。1938（昭和13）年の『やきもの鑑定読本』などで萩焼を紹介しているが、全く見当たらない[109]。まただからこそ、1939（昭和14）年に萩市が行った市の紹介でも、「一楽、二萩、三唐津」という表現は未登場なのである[110]。萩焼を飾り立てる表現として「一楽、二萩、三唐津」が用いられるようになるのは、1943（昭和18）年の楢崎鉄香『はぎやき』が初出である。楢崎鉄香（1898-1959）は萩出身

101　古賀静修（1890、36-37）。
102　金森得水（1897、37-38）。
103　川名大（2005、124）。
104　皇室中心主義を唱え日本ナショナリズムを高めていく徳富蘇峰と、新興俳句やプロレタリア俳句を快く思わない小野蕪子（小野賢一郎）とは、意気投合する局面もあったと推察される。また、徳富蘇峰が熊本県出身で、小野賢一郎が福岡県出身という、地縁的な親近感があったことも見逃せない。
105　小野賢一郎（1925、1）。
106　小野賢一郎（1928）、小野賢一郎（1931）、小野賢一郎述・伊藤博邦（1928）。
107　小野賢一郎編（1932、6-7）。
108　小野賢一郎（1932、54）。
109　小野賢一郎（1938、66-68）。
110　萩市編（1939、5）。

の日本画家で、橋本関雪に学んで関西を舞台に活躍をしていた人物である。『はぎやき』は、戦時中に、「萩の地、吉田松陰先生誕生され、勤皇精神の発生せし処、此の萩の地霊に依つて作り出されたる焼物こそは、其侭最適たること、物心供に全きものあり」という思いで、故郷の萩焼を紹介した書である[111]。陶磁器の専門家でなかった楢崎鉄香は、小野賢一郎らによる『陶器全集』なども参考にしながら執筆したことであろう。しかし何はともあれ、『はぎやき』と銘をうった最初の書である楢崎鉄香の『はぎやき』は、これ以後に萩焼を語る際の基本的な書となり、「一楽、二萩、三唐津」のフレーズもそれに伴って広がっていったのである。

以上のように、「一楽、二萩、三唐津」という「茶陶萩」をイメージするキャッチフレーズ自体は、昭和戦前期に作り上げられて普及したものであった。しかし、萩焼と千家との深い関係性が明治期に構築され、明治期の茶道ブームの中で萩焼が茶の湯を嗜む人々の中へと広まっていったことが、キャッチフレーズを生み出す土壌となっていたといえよう。

7．民芸という価値観の登場

近代の萩焼が、磁器生産を縮小・消滅させつつ茶道ブームをうけて陶器生産に特化していった様子は、第4節から第6節にかけて考察してきたとおりである。しかし、近代日本における陶磁器産地の多様性を考える際には、もう1点、民芸との関係性を抜きにしては語ることが出来ない。表2は柳宗悦が1942（昭和17）年に執筆した『手仕事の日本』に登場する陶磁器産地である。柳宗悦が高評価した産地も低い評価を下した産地もともに掲載しており、戦前の柳宗悦が把握していた大凡の陶磁器産地にあたる。ただしこの表からは、長崎県の波佐見焼、薩摩焼のうちの龍門司焼や長太郎焼、熊本県の高浜焼など、戦前においては柳宗悦があまり良く把握していなかったのであろう陶磁器産地が極めて多数あることが指摘できる。

後述するように、萩焼と民芸との関係は、多くの民芸産地ほどには直接的なものではない。しかし現在でもいくつかの民芸を名乗った窯や商店が萩にあることからも分かるように、萩焼もまた民芸ブームの影響を受けた陶磁器産地である[112]。そこで本節では、民芸運動の展開について確認をしておくこととしよう。

民芸運動を始めることとなる柳宗悦は[113]、1889（明治22）年に柳楢悦（ならよし）海軍少将の三男として生まれた。父の柳楢悦は柳宗悦が2歳の時に死去しており、父親の遺品である骨董品に馴染んで育った。学習院高等科時代には、神田神保町で李朝染付牡丹文壺を購入するなど、もともと骨董好きの少年であった。そのような学習院高等科の学生時代にあって、柳宗悦は志賀直哉や武者小路実篤ら後の白樺派のメンバー達と親交を結んだ。1910（明治43）年に東京帝国大学文学部哲学科へ進学するのと前後して、白樺派の活動にも参画している。柳宗悦の母方の叔父が柔道で高名な嘉納治五郎であり[114]、千葉県我孫子市にその別荘があった。その叔父の別荘へ友人らを伴って度々訪れていた柳宗悦は、1914（大正3）年には叔父に勧められて我孫子に移住し、その地の素晴らしさに魅入られて志賀直哉を呼び寄せたり、武者小路実篤を移住させたり、バーナード・リーチのために窯を作ったりしている[115]。

表2『手仕事の日本』にみる民芸産地（陶磁器）

青森県	悪戸焼			
秋田県	楢岡焼			
山形県	成島焼	平清水焼		
福島県	本郷焼	相馬焼		
茨城県	笠間焼			
栃木県	益子焼			
岐阜県	美濃焼			
愛知県	瀬戸焼	犬山焼	常滑焼	
三重県	伊賀焼			
福井県	氷坂焼			
石川県	九谷焼	大樋焼		
滋賀県	信楽焼			
京都府	清水焼	楽焼		
奈良県	赤膚焼			
兵庫県	丹波焼			
岡山県	備前焼	酒津焼		
鳥取県	因久焼	牛戸焼		
島根県	温泉津焼	喜阿弥焼	布志名焼	楽山焼
山口県	堀越焼	萩焼	小月焼	
高知県	尾戸焼			
愛媛県	砥部焼			
福岡県	小石原焼	二川焼	高取焼	上野焼
佐賀県	有田焼	唐津焼		
大分県	小鹿田焼			
長崎県	現川焼			
熊本県	八代焼			
鹿児島県	苗代川焼	帖佐焼		
沖縄県	壺屋焼			

出典）柳宗悦（1981、20-164）より作成。

[111] 楢崎鉄香（1943、序2）。
[112] 民芸運動は1920年代に始まったものであり、民芸ブームは1960年代に始まったものである。詳しくは後述する。
[113] 柳宗悦についての概略は松井健（2005）による。
[114] 近代日本柔道の父でもある嘉納治五郎は、柳宗悦の母である嘉納勝子と姉弟であった。姉弟の実家である嘉納家は、菊正宗で有名な灘の造り酒屋の本嘉納家の分家筋にあたる。
[115] 白樺文学館「白樺派の五人」http://www.shirakaba.ne.jp/index.htm。白樺文学館は、柳宗悦らを顕彰して佐野力（元日本オラクル社長）が私財を投じたことにより作られた、白樺派の文学者らの関連品を所蔵・展示する千葉県我孫子市にある施設である。

先んじて東洋趣味を持ち始めていた志賀直哉に影響され、柳宗悦も我孫子移住に前後して東洋の美への関心を高めていた。そこへ、山梨県出身の彫刻家で、朝鮮半島で小学校の教師をしながら彫刻の修行をしていた浅川伯教が、柳宗悦の持っていたロダンの作品を見るために我孫子を訪れた。その際、手土産として李朝染付草花文瓢型瓶（部分）を持参した[116]。柳宗悦がこれに感銘を受け、東洋の美へと開眼していったのは良く知られるところである。西洋美術や日本の古美術へのアンチテーゼとして、朝鮮、沖縄、そして日本各地の、無名の職人による民衆的工芸品の美術的価値を発掘することに、柳宗悦は精力を割き始めていく。そのような中、1923（大正12）年９月１日に関東大震災が発生した。これを期に柳宗悦は京都へと移転し、京都陶磁器試験場の研究員であった河井寛次郎や浜田庄司らとともに大々的に民芸運動を繰り広げていくこととなるのである[117]。

このように、朝鮮陶磁器の美から出発した柳宗悦の民芸運動にあっては、朝鮮由来の井戸茶碗が高く評価されている。1931（昭和６）年に執筆された「喜左衛門井戸を見る」では、茶道における「天下の名器「大名物」の正体」として、「全くの下手物である。典型的な雑器である。一番値の安い並物である。作る者は卑下して作ったのである。個性など誇るどころではない。使う者は無造作に使ったのである。自慢などして買った品ではない。誰でも作れるもの、誰にだってできたもの、誰にも買えたもの、その地方のどこででも得られたもの、いつでも買えたもの、それがこの茶碗のもつありのままな性質である」ことを強調する[118]。このように、茶道における茶器として評価された井戸茶碗は、民芸運動においてもまた高い評価が与えられることとなったのである。確かに、柳宗悦は同時代の茶器に対しては冷淡であった。「茶趣味は多くの陶器を害ひました。真の茶器は、趣味の遊びから出たものではないことを忘れるからに因る」と述べている[119]。しかし、茶道で珍重される古来の陶磁器については高い敬意を払っており、その代表が朝鮮陶磁器の井戸茶碗であったといえよう。

目を萩焼に転じると、萩焼は民芸運動が起こる以前より、近代の茶道ブームの中で、まさしく井戸茶碗の系譜を引く陶器として有名であった。明治20年代には「（萩焼は･･･引用者）高麗の韋登地名と称するものに倣ひ茶碗其他の小器を製す」と紹介されているし[120]、明治30年代にも、「（萩焼の･･･引用者）其法、専ら朝鮮韋登の陶法に倣ふ」と説明される[121]。井戸茶碗の語源として、萩焼の開祖である李勺光・李敬兄弟の出身地とされる「韋登」という地名を語源とする説を掲げながら、井戸茶碗と萩焼との連続性を見出していたのである[122]。昭和期の楢崎鉄香も「萩焼の母体は実にこの井戸茶碗」と明言している[123]。

しかし一方で、『手仕事の日本』の中では、柳宗悦は当時の萩焼について次のように述べて低い評価を与えている。引用しておこう。

> 長門の國には「萩焼」と呼ぶ名高いものがあります。萩市は毛利氏の古城のあつた所であります。港でありますから早くから朝鮮とは交通がありました。初代を高麗左衛門といふのは、もと手法を朝鮮から伝へたことを示します。白い厚みのある釉薬のかかつた陶器で、絵も何もない無地のものであります。味ひがあつて早くから茶人達に愛されました。さすがに昔のは素直な出来で、温い静な感じを受けます。併し段々茶趣味が高じて来て、態々形をいびつにしたり曲げたりするので、今は寧ろいやらしい姿になりました。自然さから遠のくと美しさは消えてゆきます。かういふことがよく解つたら、今の萩焼とても、ずつとよくなるでありませう[124]。

つまり、柳宗悦が中心となって提唱していた民芸運動において、茶道のために作るという作為が加わった萩焼は、その対象としては不十分であることを述べている。井戸茶碗を意識し過ぎてしまったものは、かえって民芸的な（無名の職人による民衆的工芸品の美術的価値という）良さが失われてしまったというのである。

116　瓢箪型の焼き物の下部であり、当初はそれが単体のものであるとして「李朝秋草文壺」と呼ばれていた。現在では、瓢箪型の焼き物の一部であるということを明示する意味で、「李朝染付草花文瓢型瓶（部分）」と名付けられている。

117　京都市編（1975、508-510）および宮地英敏（2008、285）。

118　柳宗悦（1931）。また、井戸茶碗が雑器なのかどうかという点については、韓国の陶芸家である申翰均（2008）によって朝鮮半島における神事用の器であるという説が出されている。しかし本稿においては、井戸茶碗が当時の朝鮮半島においてどのような用途であったのかという実態ではなく、柳宗悦ら民芸運動においてどのように認識されていたのかを重視する。

119　柳宗悦（1981、104）。

120　古賀静修（1890、36）。

121　高木如水（1900、長門国）。

122　同じく、福岡県の高取焼の開祖とされる八山（高取八蔵）も、韋登の出身とされている。

123　楢崎鉄香（1943、序３）。

124　柳宗悦（1981、123）。

ところが、『手仕事の日本』の文章は太平洋戦争真っ只中の1942（昭和17）年に執筆され、翌1943（昭和18）年の刊行を目指していたのであるが、検閲によって刊行が遅れて出版は戦後の1948（昭和23）年となってしまった。しかも当初は靖文社という小さな出版社から刊行されたため、1954（昭和29）年に日本民芸協会が編纂に加わった『柳宗悦選集』の１冊として、ようやくと広く読まれるようになっていく。民芸運動が知的エリートの思索に留まらず、庶民的な広がりを見せて民芸ブームとして隆盛を極めたのは1960年代以降のことであった[125]。このため、柳宗悦による萩焼評が明らかになっていくのも、戦後しばらく経ってからのことであったのである。

だからこそ昭和戦前期において、先述の小野賢一郎は「釉薬に白い釉がサツと掛つて全然真白でもなく、動きのある白さをもつてゐるのがあります。（中略）この萩の手に堅実な手法の器物がありまして、私としては寧ろこの方を好みます」と述べている[126]。また楢崎鉄香は、「萩焼は茶碗をはじめ、あらゆる雑器に至る迄も簡素なる態を持ち、高雅なる風韻を含み、味ひある轆轤の力を表現し、豊にして且つ温き感ある釉薬の輝きを見せ（後略）」と記している[127]。萩焼が茶道用の茶碗としてだけではなく、民芸の価値観で評価されていたことを看取できるであろう。

ここで、民芸運動の当事者である柳宗悦による当時の萩焼に対する評価と、柳宗悦らの民芸運動の知識を取り入れた小野賢一郎や楢崎鉄香の評価とが、真逆となっている点に注目したい。前者の柳宗悦の評価が世上に現れないうちに、井戸茶碗の系譜を引いている萩焼の性格から、無名の職人による民衆的工芸品というイメージが形成されていったのである。例えば、萩においてこの民芸の精神性を代表する人物の一人が兼田三左衛門（1920-2004）であった。兼田は、「職人って言うと、作家より下になるような気がするですいね[128]。でも、僕は職人って言われた方がいい。作家などと、思ったことないです。呼ばれたいと、思ったこともないです」といい、また「ちいっとやきものやると、『先生、先生』ってちやほや言われて怖いです。僕にも『サインしてくれ』っちゅうから、断るんです」と述べている[129]。造形・施釉とも無造作なようでいて細かい神経が行き届いていると評された兼田三左衛門は[130]、無名の職人の精神を失わないようにこだわったのであった。こうして萩焼は、民芸運動もまたその活力に加えながら、生産を行うこととなったのである。

８．おわりに

本稿では、近代日本における多様な陶磁器産地の一例として、山口県の萩焼の事例を考察してきた。全国の陶磁器産額の６-８割が岐阜・愛知・佐賀・京都という４府県に集中する明治期から昭和初期にかけて、萩焼は19世紀末においては全国産額の0.2-0.3％ほど、20世紀初頭には0.1％ほど、大正末から昭和期に入ると0.05％前後を占めるに過ぎなくなっていく。しかも、経営規模も雇用職工数が５名を超えないような、小零細な窯屋経営であったのである。近代の陶磁器業史研究のはじまりであるマルクス経済学に基づく分析においては、このような小零細経営は、大企業との競争により淘汰されて自然と消滅するという想定がなされていた。しかし実態は、小零細経営のままに生産高も横這いを維持していく。萩焼とはまさに、日本全国に脈々と息づいている多様な陶磁器産地の代表例なのである。

そもそも萩焼とは、室町期における茶道の隆盛の中で、井戸茶碗をはじめとする朝鮮半島の茶器が好まれたことから、文禄・慶長の役（1592-1598）に際して毛利輝元らが朝鮮人陶工（李勺光・李敬の兄弟）を連れ帰ったことに始まる。磁器生産も行われるようになったのはそれから200年以上経った文政６（1823）年のことであった。ところが、明治期における萩焼の生産は、長らく伝統的な陶器生産ではなく、磁器生産がその中心であった。日本酒瓶用やビール瓶用として大量に生産されたためである。1884（明治17）年のデータでは、なんと、阿武郡だけでみると85.5％が、阿武郡と大津郡を合わせても73.9％が磁器生産であり、1900（明治33）年頃にようやくと磁器生産額と陶器生産額とが逆転していく。確かに磁器生産という点だけを見れば、萩焼には岐阜県の美濃焼や愛知県の瀬戸焼といった廉価品の大量生産を行う産地や、佐賀県の有田焼や京都府の清水焼といった高級磁器の産地との、競争力を持ち得なかった。そのような意味では、旧来のマルクス経済史学に基づく近代陶磁器業史研究が想定していたように淘汰されてしまったのである。

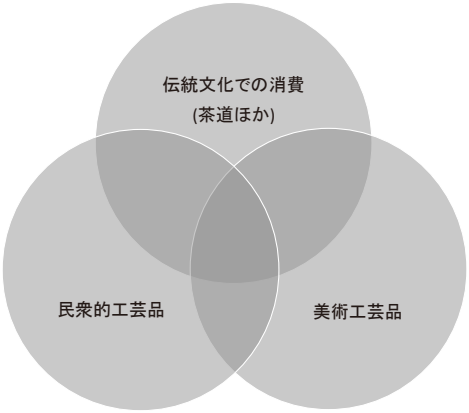
125　クック・フィリップ（1995、20）、出川直樹（1997、323-324）、濱田琢司（2000、114）などによる。
126　小野賢一郎（1938、68）。
127　楢崎鉄香（1943、序２）。
128　陶磁器界において「作家」とは、名のある陶芸家であり芸術家であるということを意味する。
129　朝日新聞山口支局編（1983、53）。
130　朝日新聞山口支局編（1983、53）。

しかし萩焼は、伝統的な陶器生産の面で生き残ることができた。茶道は、千利休によって大成されたとはいうものの、千利休の切腹後には、古田織部から小堀遠州・片桐石州へというように、意表をついて洒脱な大名茶が主流であった。しかしその中にあって、毛利家の治める長州藩では表千家を中核としつつ、石州流不昧派や江戸千家流なども嗜んでいた。近世期の萩焼の茶器はこうした中で作られていたのである。そのような縁もあって、幕末には長州藩の志士たちが京都で表千家の十一代千宗左に匿われたり、明治初年には萩の豪商である熊谷五一が十一代千宗左を支援したりといった関係がみられた。特に後者では、十一代千宗左は十一代樂吉左衛門らを連れて萩への長期滞在も行っている。このような中で、明治中期頃から盛んになっていく茶道ブームを受け、萩焼は人気を博した。井戸茶碗の系譜に連なる萩焼は、茶道を嗜む者たちに好まれて購入されたのである。昭和期に入ると、小野賢一郎によって「一楽、二萩、三唐津」というキャッチコピーも世に知らしめられた。

また萩焼にとって重要であったのは、民芸運動を始めた柳宗悦が、喜左衛門井戸をはじめとする井戸茶碗に高い評価を下したことである。確かに戦後になって柳宗悦は、茶器として趣向を凝らせ過ぎたものに対しては厳しい評価を下した。だが、井戸茶碗の系譜に連なる萩焼は、まさしく民芸運動の精神である美術的価値をも兼ね備えた民衆的工芸品から出発していたため、民芸運動の理念と合致していたのである。このようにして、磁器生産では淘汰されてしまった萩焼であるが、陶器生産においては茶道と民芸という２枚看板を得て、力強く生き抜くことに成功したのである。

昭和戦前期までを分析対象とした本稿では直接的な分析を行うことが出来ないが、陶磁器産地の多様性という観点からいうならば、もうひとつ美術工芸品的な要素を踏まえておかなければならない。帝国美術院展覧会（帝展）に美術工芸部が設置されたのは1927（昭和２）年の第８回帝展からのことであり、京都市陶磁器試験所（現産業技術総合研究所の源流の１つ）で学んだ河村蜻山・楠部弥弌や東京美術学校（現東京藝術大学）で学んだ板谷波山らが入賞した。これを契機として美術工芸としての近代陶磁が発展していくのである。萩焼にあっても、十一代三輪休雪（三輪寿雪、1983年に人間国宝）やその息子の十二代三輪休雪（三輪龍作）が様々な造形美を生み出していることは良く知られる。現在においても、民衆的な工芸品の生産がなされる傍ら、多くの作家達が美術的な陶磁器の生産をも行っているのである[131]。

図5　近代における陶磁器産地の多様性を支える枠組み



以上を踏まえ、日本における多様な陶磁器産地を支える基盤として図５を作成した。従来、食料品や日常生活品の消費動向に着目しつつ、古島敏雄（1996）、谷本雅之（1996）、中西聡（2000）などにおいては、人々の消費行動が漸進的にしか変化していかず、一部においては旧来の慣習を固守する側面が強いことを明らかにしてきた。そしてこのような伝統的な消費行動の墨守こそが、在来産業における在来的な経済発展を支えるメカニズムであると考えられてきたのである。

しかし、萩焼を代表とする近代日本の多様な陶磁器産地を支えるメカニズムは、単なる旧習の墨守ではなかった。近代の茶道とは、近代における数寄者ネットワークとして新たに作り上げられたものであり、その中で萩焼は「一楽、二萩、三唐津」という位置付けが与えられた。茶道をはじめとした華道や香道など様々な伝統文化において、陶磁器は広範に使用されるものであった。また、民芸とは無名の職人による民衆的工芸品の中から、民芸運動の中でその美術的価値を「発見」していくものであった。民芸は人々の郷愁を掻き立てることとなり、高度経済成長期にかけて一大ブームを発生させていく。骨董ではない美術工芸品は、近代・現代の人々の生活空間を満たすべく、伝統的な技法と同時代的な美意識をもとにして新たに作り上げられたものである。各地での美術展や個展により、多くの作家達の作品が紹介されていくことになる。つまり、近現代における陶磁器の一部は、伝統的で、日本的で、我々のいる空間に調和しているという意味合いが付与されることとなり、それゆえにこそ大量生産・大量消費に収斂されることなく、多様な陶磁器産地における生産と我々による多様な消費が続けられているのである。

※　本稿の執筆にあたっては、2014年６月７日に山口

[131]　例えば、萩焼の代表的な店舗である彩陶庵（http://www.saitoan.com/）などを参照。

県立萩美術館・浦上記念館で開催された日本陶磁協会萩後援会平成26年度総会での講演会で貴重な御意見をいただいた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

文献一覧

朝日新聞山口支局編（1983）『萩焼人国記』葦書房

石崎泰之（2014）『茶陶萩』萩ものがたり

今給黎佳菜（2010）「近代日本陶磁器業における業界新聞」『人間文化創成科学論叢』お茶の水女子大学、13

今給黎佳菜（2012）「近代日本における欧米向け薩摩焼の輸出」『交通史研究』79

大森一宏（1993）「明治後期日本の対米陶磁器輸出と森村市左衛門の経営理念」『渋沢研究』6

大森一宏（1995）「明治後期における陶磁器業の発展と同業組合活動」『経営史学』30-2

大森一宏（1996）「両大戦間期における工業組合活動と陶磁器輸出の発展」（松本貴典編『戦前期日本の貿易と組織間関係』所収）

大森一宏（1997）「海外技術の導入と情報行動」（佐々木聡・藤井信幸編『情報と経営革新』同文舘出版）

大森一宏（2003）「戦間期日本の海外情報活動」『社会経済史学』69-4

大森一宏（2004a）「愛知県の陶磁器業と前田正名の五二会運動」『愛知県史研究』8

大森一宏（2004b）「常滑窯業の発展と同業者組織」『経営研究』愛知学泉大学、18-1

大森一宏（2008）「森村市左衛門」日本経済評論社

岡桂子（2011）『近世京焼の研究』思文閣出版

小野賢一郎（1925）『陶器を試みる人へ』中央美術社

小野賢一郎（1928）『陶器を中心に』万里閣書房

小野賢一郎（1931）『陶心俳味』茜屋書房

小野賢一郎（1932）『茶碗の見方』宝雲舎

小野賢一郎（1938）『やきもの鑑定読本』宝雲社

小野賢一郎述・伊藤博邦（1928）『やきものの話』社会文化協会

小野賢一郎編（1932）『日本陶器全集』第14巻「楽陶工伝」、陶器全集刊行会

家臣人名事典編纂委員会編（1989）『三百藩家臣人名事典』6、吉川弘文館

鎌田久明（1940）「陶磁器業に於ける工場制工業の成立過程」『経済史研究』日本経済史研究所、24-2

鎌田久明（1941）「明治二十年前後の京都陶磁器業」『経済史研究』日本経済史研究所、26-3

鎌谷親善（1986）「明治初期における陶磁器業の近代化政策」『化学史研究』35

鎌谷親善（1987a）「京都市陶磁器試験場-明治29年～大正9年-1」『化学史研究』40

鎌谷親善（1987b）「京都市陶磁器試験場-明治29年～大正9年-2」『化学史研究』41

川名大（2005）「小野蕪子」山下一海ほか編『現代俳句大事典』三省堂

北大路魯山人（1933）「瀬戸・美濃瀬戸発掘雑感」『星岡』28

京都市編（1975）『京都の歴史8古都の近代』學藝書林

クック・フィリップ（1995）『ポストモダンと地方主義』日本経済評論社

熊沢次郎吉編（1929）『工学博士北村弥一郎窯業全集』3、大日本窯業協会

河野良輔（1990）「山口萩焼の成立」（山口萩焼作家協会編『山口萩焼開窯一〇〇年の歩み』大和作太郎顕彰会）

熊倉功夫（1980）『近代茶道史の研究』日本放送出版協会

熊谷五右衛門（1993）「熊谷家の歴史と茶道具」『茶道雑誌』1993年3月号

桑田忠親（1987）『茶道の歴史』講談社学術文庫（もとは1976年に講談社より刊行）

桑田忠親（1990）『古田織部の茶道』講談社学術文庫（もとは1968年に徳間書店より刊行）

桑田忠親（2004）『千利休』講談社学術文庫（もとは1977年に日本放送協会より刊行）

古賀静修（1890）『陶器小志』仁科衛

齋藤康彦（2012）『近代数寄者のネットワーク』思文閣出版

佐々木達夫（1991）『陶磁』東京堂出版

白木沢旭児（1990）「1930年代の統制経済と中小工業」『日本史研究』331

白木沢旭児（1992）「1930年代の陶磁器市場と輸出組合」『社会経済史学』57-6

白木沢旭児（1999）『大恐慌期の日本の通商問題』御茶の水書房

申翰均（2008）『井戸茶碗の謎』バジリコ

千宗左（1988a）「碌々斎のこと（一）」『同門』1988年3月号

千宗左（1988b）「碌々斎のこと（二）」『同門』1988年4月号

高木如水（1900）『陶器類集　鑑定秘訣』中、2巻、青木嵩山堂

多治見市編（1987）『多治見市史』通史編、下、多治見市

田中助一（1964a）「熊谷五一と茶道（一）」『茶道雑誌』31-4

田中助一（1964b）「熊谷五一と茶道（二）」『茶道雑誌』31-5

田中助一（1964c）「熊谷五一と茶道（三）」『茶道雑誌』31-6
田中助一（1964d）「熊谷五一と茶道（四）」『茶道雑誌』31-7
田中助一（1964e）「熊谷五一と茶道（五）」『茶道雑誌』31-8
谷晃（2012）「茶の湯における萩焼の受容」山口県立博物館・浦上記念館ほか編『古萩』山口県立萩美術館・浦上記念館
谷本雅之（1996）「醸造業」西川俊作他編『日本経済の200年』日本評論社
出川直樹（1997）『人間復興の工芸』平凡社
内藤道太郎編（1902）『第一回全国窯業品共進会報告』大日本窯業協会
内藤道太郎編（1905）『第五回内国勧業博覧会窯業品審査報告』大日本窯業協会
中西聡（2000）「文明開化と民衆生活」石井寛治他編『日本経済史1幕末維新期』東京大学出版会
中野等（2008）『文禄・慶長の役』吉川弘文館
中村隆英（1971）『戦前期日本経済成長の分析』岩波書店
中村隆英（1985）『明治大正期の経済』東京大学出版会
奈良本辰也（1943）『近代陶磁器業の成立』伊藤書店
野原敏雄（1982）『地域産業の成立と展開』中京大学商学研究叢書編集委員会
萩市編（1939）『萩市勢要覧』萩市役所
萩市史編纂委員会編（1983）『萩市史』1、萩市
萩市史編纂委員会編（1987）『萩市史』3、萩市
萩市視編纂委員会編（1989）『萩市史』2、萩市
橋詰隆康（1973）『萩焼』三一書房
濱田琢司（2000）「民芸ブームの一側面」『人文論究（関西学院大学）』50-2・3
平野雅章編（1980）『魯山人著作集』1巻「陶芸論集」、五月書房
古島敏雄（1966）『産業史Ⅲ』山川出版社
古島敏雄（1996）『台所用具の近代史』有斐閣
松井健（2005）『柳宗悦と民藝の現在』吉川弘文館
三島康雄（1955）「陶磁器業の産業革命」『経済論叢』京都大学、75-1
水林彪（1987）『日本通史Ⅱ　封建制の再編と日本的社会の確立』山川出版社
宮地英敏（2003a）「近代日本陶磁器業と専業小経営」『社会経済史学』69-1
宮地英敏（2003b）「近代日本陶磁器業における技術導入」『経済学研究』東京大学、45
宮地英敏（2004）「近代日本陶磁器業と中小企業」『経営史学』39-2
宮地英敏（2005a）「近代日本陶磁器業における機械制大工業の成立」『経済学論集』東京大学、71-2
宮地英敏（2005b）「明治期日本における「専門商社」の活躍」『企業家研究』2
宮地英敏（2006）「起立工商会社と政府融資」『経済学論集』東京大学、71-4
宮地英敏（2008a）『近代日本の陶磁器業』名古屋大学出版会
宮地英敏（2008b）「陶磁器職人の成形技術」『歴博』148
宮地英敏（2010）「明治前期における博多織の生産動向について」『市史研究ふくおか』5
宮地英敏（2011）「近代日本の中小陶磁器業における企業家活動」『企業家研究』8
宮地英敏（2014）「日本経済史学の学問的特性に関する一考察」『エネルギー史研究』29
本宮一男（1997）「海外情報と陶磁器輸出」（高村直助編『明治の産業発展と社会資本』ミネルヴァ書房）
森谷尅久（1984）「近世陶磁生産の発展」（永原慶二・山口啓二編『講座・日本技術の社会史4窯業』日本評論社）
柳宗悦（1931）「「喜左衛門井戸」を見る」『工藝』5（後に、柳宗悦『茶と美』講談社、1986年などに所収）
柳宗悦（1981）『柳宗悦全集』第11巻、筑摩書房（本稿で参照した『手仕事の日本』は、1948年に靖文社より刊行された）
山形万里子（2010）「書評宮地英敏著『近代日本の陶磁器業』」『経営史学』45-3
山口和雄（1956）『明治前期経済の分析』東京大学出版会
山口県内務部編（1927）『山口県ノ窯業概況』山口県
山田雄久（1996a）「明治前期における肥前陶磁器業の輸出戦略」『経営史学』30-4
山田雄久（1996b）「明治大正期陶磁器産地企業の経営」『産業と経済』奈良産業大学、10-2・3
山田雄久（1996c）「明治前期陶磁器産地における輸出戦略」『産業と経済』奈良産業大学、11-2
山田雄久（1999）「寺内信一翁の有田磁業史研究」『帝塚山経済・経営論集』帝塚山大学、9
山田雄久（2003）「明治中期における日本陶磁器業の情報戦略」（徳永光俊・本多三郎編『経済史再考』思文閣出版）
山田雄久（2004a）「明治中期陶磁器業産地の金融・教育機関」『経済学』大阪大学、54-3
山田雄久（2004b）「明治後期における日本陶磁器業の輸出振興策」『帝塚山経済・経営論集』帝塚山大学、14
山田雄久（2007）『香蘭社130年史』香蘭社
義江彰夫（1986）『日本通史Ⅰ　歴史の曙から伝統社会の成熟へ』山川出版社

吉田元（2011）「明治初年の京都のビール」『日本醸造協会誌』106-12
渡辺芳郎（2001a）「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産(1)」『鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集』53
渡辺芳郎（2001b）「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産(2)」『鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集』54
渡辺芳郎（2002）「明治期～昭和戦前期の鹿児島県における陶磁器生産(3)」『鹿児島大学法文学部紀要　人文学科論集』55

The diversity of the production area of potteries and porcelains in modern Japan
―Mainly focusing on the Hagi Yaki―

Hidetoshi MIYACHI

ABSTRACT

This paper analyzes Hagi Yaki, in order to consider the diversity of the production area of potteries and porcelains in modern Japan. In Hagi area, pottery's production started about 400 years ago, and porcelain's production started about 200 years ago. In the first half of Maiji era, the volume of porcelain's production accounted for about 70% which was 2.5 times of the pottery's production. However, after that, porcelain's production decreased gradually, because Hagi Yaki lost market competition with other porcelain's production areas. On the other hand, the pottery's production was satisfactory by the favor of a tea ceremony boom in early modern Japan. In addition there were two development of Hagi Yaki's pottery in 1930's. First, it may be mentioned slogan called 'Ichi Raku Ni Hagi San Karatsu　(Raku Yaki is the best. Hagi Yaki is the second best. Karatsu Yaki is the third best.)' and in the second it can be pointed out the Mingei Movement begun by Muneyoshi YANAGI and others. In this paper, I concluded that there were many non-industrialized production areas of potteries and porcelain in Japan, because of the Japanese consumers' diversity of likings and aesthetic sense.